

## 2026 海城港湾空港技術報告会（第13回）の開催（九州地整局）

港湾空港関係の最先端の技術開発を産官学で共有



行政や大学、民間企業の関係者が出席して開かれた「2026 海城港湾空港技術報告会」

九州地方整備局は27日、「2026 海城港湾空港技術報告会（第13回）」を福岡市の九州大学医学部百年講堂で開催した。報告会は地盤工学会CPDプログラム認定として会場とWEBによるハイブリッド方式で約80人が参加し、九州・下関地区で取り組まれている最新技術の情報を産官学で共有した。



挨拶の鈴木港湾空港部長

報告会の冒頭で、九州地方整備局の鈴木崇弘港湾空港部長は「2014年からスタートした海城港湾空港技術報告会は、国立大学の現状や九州・下関地区で行われている新技術等を共有する事で様々な課題解決に取り組んでいます。今回は、全国の先進的技術紹介を3つと産官学の技術展望3つの合計6つを予定しており、産官学が連携強化と技術的な課題解決に繋げていきたい」と挨拶した。

第1部は、第7回インフラメンテナンス大賞を受賞した㈱不動テトラ総合技術研究所研究開発室第三研究開発グループの昇悟志グループリーダーが「ICT技術を活用した消波工メンテナンスの設計・施工手法の確立に向けた取り組み」と題し、消波ブロック据付シミュレーションをICT施工への活用等を紹介。令和6年度地盤工学会九州支部技術賞を受賞した五洋建設㈱土木部門環境事業部の澤口大夢氏が「八代港大築島土砂処分場（中仕切堤）におけるカルシア改質土の冬季施工について」と題し、浚渫土と改質剤を混合した施工方法を紹介。令和6年度地盤工学会賞技術業績賞を受賞した㈱日建設計都市・社会基

盤部門シビルグループエンジニアリング設計部アソシエイトの片桐雅明氏が「受入土量の変更に対応した大規模土砂処分場のフレキシブルな埋立技術の開発」と題し、新門司港沖土砂処分場における埋立技術について紹介があった。

休憩を挟んで第2部では、産官学の技術展望として九州大学工学研究院社会基盤部門の井手喜彦助教授が「九州沿岸の高潮特性と将来の港湾・沿岸防災で考慮すべき視点」と題し、高潮防災で海域ごとの発生メカリズムに即した対策等を紹介。博多港ふ頭㈱コンテナ事業部の重富康文部長が「カーボンニュートラルポートの取り組みとBCPの両立」と題し、災害時でも物流を止めないための機能維持等の紹介。(一社)寒地港湾空港技術研究センターの平澤充成審議役が「年最大クラスの発生波浪と地域規模の気候振動との関係～北海道太平洋沿岸海域を対象として～」と題し、苫小牧港周辺海域で発生する年最大クラス波浪のメカリズムについて紹介があり、その後の質疑応答では参加者から活発な意見交換が行われた。